

役中御講御法門 石岡日養上人のご講話に学ぶ (H28/12)

「私が組長になったら」 (1) 組長とは

昭和四十二年『信徒心得帳』収録の石岡上人の代表的な講話、「私が組長になったら」から数回に亘って学びます。言うまでもなくこれは、組長の心得について語られたものです。戦後の宗教法人令の施行で各寺院が独立した宗教法人の格を得るようになり、宗門はそれらの包括法人という役割になりました。そこで各寺院が独自に組を作り、また組長を任命するようになっていくのですが、かつては本山の視察を得て組の設立が認可され、講有から組名が授与され、組長も任命されていましたから、今よりも随分重みがありました。

そもそも各地への弘通と共に「講」と呼ばれる信徒の組織を結び、「講元」となる信徒を軸に伸展を図ってきたのが門祖日隆聖人の頃(室町期)に既に見られる妙法弘通の形態です。即ちお寺や僧侶(教務員)を核とせず、信徒組織を中心に地域に妙法を定着させたのが組の原型ですから、その中心となる組長の存在感や影響力は大きなものがあつたのです。故に開導聖人の御指南中にも、組内信徒の教えの親としての組長の役割は自然に記されます。

時代が移り、そんな組の拠点に道場が出来て立派な寺院が建立され、かつては本山から迎えていた御法義の指導者の定任を得てお寺や教務員を中心とする形が出来てきましたが、組の運営までも教務さんに任すのか、あるいは講の伝統を継いで主体的にご奉公しているかで弘通力は大きく異なります。もちろん前者は姿勢が受け身のお客さん的なご信心で、地域の世話役的な感覚の組長ですから、佛立菩薩道を実践する集団にはなり得ないのです。そんなことを意識して、栄えある本門佛立宗の組長像を考えていただければと思います。

▼僧俗一体……石岡上人のご指導には、能所のケジメ、即ち教える側と教わる側の在り方を厳しく教えるものが多いのですが、それは教務員と信徒の溝を深めよということではありません。故に法縁に結ばれた師弟が手を取り合い、妙法弘通という一つの目的に向かつて僧俗一体、教講一致で努めるご奉公を教えられたのです。「それはお講師の仕事」と手出ししないのではなく、教務さんのご奉公を覚えてお手伝いできるぐらいを目指しましょう。

▼組と信者を預かる……御宝前からお預かりしているという意識は大事で、故に困難も乗り越え、ご弘通に励んで、「大きく育てて御宝前にお返ししよう」という信心が育つのです。

▼即聞即行……聞いたことを直ちに実行に移すのは佛立信心の鉄則ですが、その範を示すことで組長のリーダーシップが高まります。御法門で聴聞したこと、役中会のご披露など、改良にはグズグズとしがちな凡夫の心を、即聞即行の姿で折伏できる人になりましょう。

▼素直正直、お寺の言う通りに……一言を吐きたい凡夫ですが、個々の都合や意見をぶつけるだけでは異体同心の弘通力が出ません。意見は言いつつも、皆が心一つにご奉公できるよう工夫すべきで、率先してお寺の方針に従い、協力するのは大事な心得なのです。

▼こまめに身を動かす……なんでも後回しにせず、今させていただきます。開導聖人は「身がらの軽ろきは信心重し。身がらの重きは信心軽ろし(14/396)」と仰せです。

▼御宝前にお縋りし、お看経をしつかりといたたく……人のお世話をする菩薩行は、思うようにいかないことが多々あります。善意が悪意で返ることも珍しくはありません。そんなとき、自身の不甲斐なさを嘆くより、自力を捨てて経力に縋るのがご奉公の極意です。

▼我を出さない……総じてこれらの心得は、我を出さずに御法の御意に添うご奉公を心掛けよと教えておられるのです。佛立菩薩は如来のお使い。自分考えて人助けは出来ません。

「御教歌」 信行は仏祖の教へ其ままに わたくしなしにとむるをいふ

役中御講御法門 石岡日養上人のご講話に学ぶ (H29/1)

「私が組長になったら」(2) 具体的なご奉公①

昭和四十二年刊『信徒心得帳』収録の「私が組長になったら」には、実際に石岡上人が組長になったとしたら、すぐに取り掛かるであろうご奉公が具体的に述べられています。

これは御指南の筋を背景とし、石岡上人の指導経験の中でもご弘通の成果を伴う模範的な事例を踏まえて記されたものです。ですから、ご奉公の仕方には役中さんそれぞれの考え方や信念、ご奉公の環境や得手不得手等があるのですが、実際にご利益を顕しつつご信者を育て、組を発展させる理想形として捉えて、目標にして挑戦いただきたいと思えます。

▼**早速、お寺へ毎日、朝参詣**……「お役は信心で勤めるもの」というのは鉄則で、自身の力量のみを頼るやり方は危険です。いくら賢くてご信心の知識が豊富でも、如才なくしゃべる才能があっても、菩薩行は人が相手ですから思うように進まないこともあります。何より私たち自身が生身の人間ですから、やる気があっても所用に邪魔されたり、健康を損ねてご奉公が続けられなくなることもあります。ですから、まずは御法のご加護を願い、御経力を頂戴しつつご奉公をさせていただく真摯な姿勢が大切です。そこで今まで以上に自身のご信心を鍛え、高める工夫が必要になります。いろいろな考えずに朝参詣に励みなさい」と最初に仰せなのは、論より証拠の実を伴うご指導と拝します。朝参詣には信心錬磨のいろんな要素があります。なぜ？と考えて納得してから始めるより、真剣に朝参詣に挑戦して妙味を体でつかみなさい。必ずご奉公が上手く進むよと仰せになっているのです。

▼**年の初めが勝負**……何事も最初が肝心で、成功する人は仕掛けも早いものです。逆に出鼻を挫かれると後れを取り、それだけ成果は遠くなります。故に年の初めのご奉公が大事なことを、次いで教えられたと拝します。年始の挨拶代わりの組内巡回は素晴らしいご奉公です。組内の御宝前のお祖師さまに年賀の口唱を捧げて回るのは組長(班長)の信心の極みですし、その濃やかな配慮は組内のご信者との信頼関係を深めます。正月気分が早く抜けて、大切なご奉公の月日を有効に使うことにもなるのです。加えて他の組役中と連携し、寒修行の将引をせよと仰せです。これにより組内に弘通の「動き」が生まれます。弘通年度末や御会式前によく腰が上がるのではご弘通はできません。せつかく年始に寒参詣があるのですから、それを通して早く組内のエンジンをかければ応分の成果が期待できます。もちろん、その牽引者の役中が、寒修行の皆参を目指すよう背中を押し、寒修行中の信心増進を図るのも大事なご奉公です。なぜなら組長一人の信心では、組の成長は困難だからです。ともかく年初に心機一転した「やる気」を行動に移し、寒中から動きましょう。

▼**全力で臨む**……どこにも様々な事情はありますが、それを踏まえて随他意を許す中から新たな成長は望めません。出来ないことを出来るように努力するから組が変化をするのです。その意味で、総参詣日の組内十割参詣への挑戦は大きな価値があります。「無理」とあきらめる前に御法のお力添えを請い、皆と協力していろんな工夫を試みましょう。日曜、即ち休日ぐらいはゆっくりさせろと思うか、お休みだからたくさんご奉公できると喜べるかも信心の有無が表れます。お教化も「そのうちに」とのんびりせず、年の初めから一個目を目指すぐらいの気力の充実ぶりが大事です。とにかく、張り切り過ぎて空回りを心配されるぐらいの組長でないと、いいご奉公は出来ないぞと教えておられるのです。教務さんとよく連携し、組内の育成に尽力いただける空気も、組長のやる気が大きく左右します。

「御教歌」かたときもあだにくらすな信者たち 如説修行の日数ならずや

役中御講御法門 石岡日養上人のご講話に学ぶ (H29/2)

「私が組長になったら」③ 具体的なご奉公②

昭和四十二年刊『信徒心得帳』収録の「私が組長になったら」の中の、実際に石岡上人が組長になったとして、すぐに取り掛かるであろうご奉公の具体例を順次学んでいます。

これらは御指南の筋を背景とし、石岡上人の指導経験の中でもご弘通の成果を伴う模範的な事例を踏まえて記されたものです。ぜひ目標にして、挑戦いただきたいと思えます。

▼御利益の御礼に御講奉修を勧める……役中としてのご奉公の目的は「ご利益をいただくかせる」ことです。お助行も将引も懈怠の折伏も、すべて相手にご利益をいただいてもらうため。朝参詣のお誘いも、御有志やご奉公当番のお勧めも、「目標に足りないから」「手不足だから」等とやっている間はご信心が育ちません。身を惜しまずに喜んでご奉公できるのは、この役中ご奉公の目的をちゃんと押さえているからで、そこに愚痴や不平がなく、工夫や根気の伴う菩薩行が生まれ、結果として起信や弘通のもとになる現証を得るのです。石岡上人は、こうして確実にご利益を顕すことを目的とする以上、ご利益を得たあとの育成も考えてご奉公せよと仰せで、まず御講の願主を勧めることを教えておられます。

ご弘通の道場を開く御講の施主は大きな功德があると教わりますが、実際に勤めると時間も手間もお金もかかりますから、最初は尻込みしがちです。特に「家が狭い」「他人を招くことがない」といった人は猶更でしょう。ご利益を得たときの喜びは、そんな弱気の背中を押して、御講を勤めて大功德を積む信者へと、成長するきっかけとなるのです。逆に御講願主の育たない組は、この勧めるタイミングや育成の在り方を見直すといいでしょう。

▼巡回助行の計画を立てる……組内の巡回助行は育成の大事なご奉公ですから、計画的に行う必要があります。お助行に慣れない間は、役中さん宅でお助行の稽古をするのも良いですが、やがては担当する信徒宅に定期的にお看経に行けるようになりますねばなりません。家族の在宅の時間を把握し、ご先祖のご命日などのお助行を受けやすい日を選んで、ご奉公の予定や体験談を伝えるに通うことで育成は出来ます。石岡上人が仰せなのは、そんな計画性を持ったお助行の実践です。教務さんの予定をいただいて実施したり、総助行日を設定して数組が一斉にお助行に回り、最後に合流するなどのご奉公の仕方は、組内の役中さんの志気を高め、自身も現証をいただいて質の高い役中さんを育てることに繋がります。行きやすい家にお助行先が集中し、お客さんのように受け身で参る助行になりませんように。

▼ご披露の仕方の工夫……せっかくの優れたご奉公計画も、組内の信徒に伝わらなければ功德を積む人は広がりません。故にご奉公は周知徹底が大切で、ご披露が上手に出来れば成功への道は半ば達したと言えます。そこで石岡上人は、「役中たるもの、ご披露の工夫を怠るな」と教えているのです。御講は組の御会式ですから、ひと月の中で組として一番力を注がねばなりません。そうして勤める御講の場を更に活用すれば、ご披露もより効果的に行えるのは間違いないのです。参詣者が功德を積むご奉公の予定をよく理解し、「そういうことなら頑張ってみよう」とやる気になっていただけるよう、時には視覚にも訴えながら挑戦するのは良い試みだと思います。「婦人会の黄色い声で」と仰せなのは、明るく、賑やかなご披露を心掛けなさいということでしょう。渋味のある重厚な声のご披露も良いですが、やる気が削がれるような陰気な話し方は厳禁です。何事も陰陽の二面から説明が出来ますが、ご信心は「陽に説け」と教わりますので、そうした努力や工夫も大切なのです。

「御教歌」 信心をすすめんと思をいころこそ そこが功德のわく処なれ

役中御講御法門 石岡日養上人のご講話に学ぶ (H29/3)

「私が組長になったら」(4) 具体的なご奉公③

昭和四十二年刊『信徒心得帳』収録の「私が組長になったら」の中の、実際に石岡上人が組長になったとして、すぐに取り掛かるであろうご奉公の具体例を順次学んでいます。

今回の箇所は、丁寧にお世話をさせていただく大事があげられています。実際、ご信心を覚えてご利益を頂かれる方は、根気よくお世話をされる方の存在が、おおむね大きく影響しています。ご信心は理屈では得られません。言葉で教えるだけでなく、ご信者にとつて当たり前のご奉公も身に付くまで何度も通い、丁寧に教えるご奉公を目指しましょう。

▼組長は組内のお母さん……母親像も昔とはずいぶん違ってきたかも知れませんが、ここでは献身的に子育てをする母性を以て、組長や役中信徒のご奉公姿勢を教えています。

仏教では伝統的に、我が子が一人前に育って欲しいからこそ、自分のことは我慢しても子育てに専念できる母性を菩薩の慈悲心に譬えます。素直なご信者ばかりではありませんが、手のかかる子も可愛い我が子と慈しむ母親を目指し、育成を通して菩薩心を磨くのです。

▼特に新教化のお方に信心を呑み込んでもらう。易しく、出来やすく、ご利益の有難いことと、賞罰のあらたかなことを握ってもらう……その母性を、まず新しい方に向けよと仰せです。ベテランの気心の知れた人との付き合いは楽ですが、その楽に馴染むと面倒な初心者が増えたりします。ご信心を始めたばかりの頃に、ご利益の結構さと御罰の怖さをきちんと教えられた人はご信心が伸びます。ここが曖昧な人は、総じてご信心が温いものです。

▼御本尊が奉安できたら四〇五日くらい続けて手ほどきを。ご婦人によく呑み込んでもらう……生活の場である家庭に御宝前をお祀りし、ご信心中心の日常生活が出来るか否かは、育成の大きなポイントです。調子よくご奉公しているようでもトラブルが多く、ご信心に波のある人は、家庭の御宝前のお給仕がお粗末で、家族もご信心を離れた生活であることが多いのです。逆に御宝前中心の生活が出来ていけば、やがてご利益を感じ、ご奉公もできるようになります。そのためには最初が肝心。開導聖人は御宝前のお給仕を「主がすべきもの」と仰せですが、昔より家で仕事をする自営業者が減った近代は、その原則のためにも家庭を守る主婦にお給仕を教える指導をされたのでしよう。今は主婦業も減っています。その家庭に応じたお給仕の在り方を考え、日常的に実践できるように教えましょう。

▼朝参りに誘う。朝参りに行く前に、自宅の御宝前のお看経を少しでもお上げする……一日の始まりの朝一番にお寺を目指し、本堂のお祖師さまにご挨拶申し上げて大きな声で御題目を唱え、御法門を聴聞してご信心を修正する……。そんな朝参詣は、いろんなご奉公の中でもひととき大きな功德を得ます。故に新しいご信者の育成には最適で、多くのご信者さんの姿も、ご信心を具体的に覚えていく助けとなるのです。ただ、朝の忙しい時間の参詣は、慣れない人にはハードルが高いものです。夜更かし癖があつて朝起きが苦手な人もいます。ですから最初は、誘う人がないと朝参詣が出来ません。そこで「朝参詣のための努力がたいへんな人ほど功德が大きい」と教え、積極的に連れ参詣に努めましょう。

また、朝参詣をすることで家の御宝前のお給仕が疎かになるといけませんので、石岡上人は「少しでも自宅の御宝前でお看経を」と教えるよう添えられています。大事なことです。

▼千日参りのご利益の大きなこととお話しする……なにことも継続が大事です。朝参詣も当初の目標に千日参詣を勧め、続けることで功德行を身に付けるよう教えているのです。

「御教歌」折伏を受けて信行すすむをば 見る安穩のはるぞめでたき

役中御講御法門 石岡日養上人のご講話に学ぶ (H29/4)

「私が組長になったら」(5) 具体的なご奉公④

昭和四十二年刊『信徒心得帳』収録の「私が組長になったら」の中の、実際に石岡上人が組長になったとして、すぐに取り掛かるであろうご奉公の具体例を順次学んでいます。今回は御講やお助行の参詣が身に付くようにとのご指導です。他のご信者宅に参ることは、いろんな意味で勉強にもなり、刺激にもなっており、ご信心を育てるものなのです。

▼御講にお誘いする……：せっかく真実の大法を学ぶ佛立信者となつたのに、その「学ぶ場」に通うことを教わらないと、いつまで経っても自身の罪障は消滅せず、ご利益を得て幸せな人生に転ずることも叶いません。開導聖人は「御講は御弘通の道場」と仰せになり、「鑄刀を研ぐ場」とも教えられました。新しい人も若い人も、忙しい人も遠い人も、御講参詣でご信心を磨くことを覚えるまでは、丁寧に、根気よく、将引をさせていただきますよう。もちろん、相手の方が参りやすい日時をあらかじめ調整することや、教養会の御講等の他の御講席への案内も含めて、「どこに参つてもらおうか」とアンテナを張ることが大事です。

▼追々お助行にも、「一軒か二軒、ちよつとお参りしなさい」と気軽に将引する……：いつまでもお世話になるだけのご信心、頼まれて渋々ご奉公をするご信心になつてしまうと育成の失敗です。「お役に立つならさせていただけます」と進んで功德行に参加し、罪障消滅に身を労して喜べるのが法華経本門の教える「菩薩行」なのです。そんな菩薩になれるよう育成者は導かねばなりません。それには、いろんな事情でご信心をされる方に触れ、その方の幸せのために一心に口唱させていただくお助行が最適、と教えておられるのです。

▼早く帰宅させる。お参りやお助行が家庭や商売の邪魔にならぬよう、必ず心を配る……：「ご信心第一」「ご奉公優先」で臨めば、仕事や家庭のことも上手くいくというご利益がいただけますが、だからといって無駄に長く引き留めるのは意味が違います。開導聖人は「長尻は御免下されお互ひに日をいたづらにくらす罪あり」と御教歌され、「長話に浪費する時間は勿体ないぞ。弘通に回せ」とお戒めです。特に役中さんと新しいご信者の場合は、主導権のある役中側が切り上げるタイミングを配慮してあげないと、次から「長くなる」と敬遠されることもあります。滅多に出来ない人に「ここで遭つたが百年目」と捕まえて帰さないのは逆効果。ご奉公に出たので家庭や仕事が上手くいったという充実感は生まれません。

▼だんだん顔なじみになったら一日一軒のお助行に誘い、一人歩きさせる……：新しい人や普段ご奉公をされない人の多くは、身内や教化親、担当の役中さんぐらいしか面識がありません。その狭いご信者間の人間関係を拡げてあげ、組内はもちろん他の組にも「ご信心の友」を得ていくことは、ご信心の成長を助けます。「法は人に依て弘まる」と教わる所以です。ですから、いろんな家へのお助行を誘い、顔なじみのご信者が増えるよう導いてあげましょう。連れ歩く新入信徒が自分より波長の合うご信者と出会うこともあります。自分がお世話している間は不熱心だった信徒が、連れ参詣した新入信徒と気脈を通じて頑張ることもあります。相性等を私たちの側で考えず、いろんな人の縁をつないであげるので、多くの人との面識が出来れば、自分でお助行ができるようになります。そもそも、お寺や御講席で学んだことを生活の中で実践できるようにすれば「一人歩き」をする一人前の信者と言えるのですが、その学んだことの実践の基本は、「普段から下種結縁の話が出来る」ということと「育成のためのお助行ができる」ということです。ここを目指します。

「御教歌」 講中と成て御講へ参らねば 講の外なる人にかはらず

役中御講御法門 石岡日養上人のご講話に学ぶ (H29/5)

「私が組長になったら」(6) 具体的なご奉公⑤

昭和四十二年刊『信徒心得帳』収録の「私が組長になったら」の中の、実際に石岡上人が組長になったとして、すぐに取り掛かるであろうご奉公の具体例を順次学んでいます。

今回の箇所は「財の功德が積める信者」となるようにとのご指導です。お金の話は「欲深い」と思われかねないので言いにくいものですが、自分の欲心で言うのではありません。生活の基盤のお金を使って功德を積む道は、現代社会では生活上に直結するのですから、相手のためにしっかり教えてあげましょう。教わらずにお金で罪障を積んでは大変です。

▼その頃、お初のお金を取って、ご信心の費用は家庭経済に影響しないよう、いつでも気持ちよくお上げできるように、御宝前費として「煩惱のために手をつけないお金(財)」を用意する道を教える……「その頃」はお寺や御講に将引し、お助行にも誘い始めた頃の意です。お金を使った具体的なご奉公も、時間や労力などを「御宝前第一に使って喜べる信心前」を育てる中にあります。ですから代価の清算のようにお金を動かす感覚ではなく、我が思いを込める大事を教えます。たとえば、ご信心に使う金額は個々の信心前や経済事情で異なりますが、それが気持ちよく使えるか、愚痴や不平がこもるかは、小さな心得が左右します。すなわち、誰でも手持ちが乏しくなれば出し渋りがちになるもので、故にせっかくご奉公に使うお金に愚痴がこもり、功德を積み損ねないように、最初にご信心のお金を取らせていただくことを「お初穂の信心」の中で教えよと指導されているのです。「まず御宝前に」という「お初穂の信心」は功德行の基本です。随喜心で使うから一粒万倍なのです。

▼進んでは予算生活、貯金を奨励する。最初は必ず「収入不足で貯金どころではない」と一喝喰うこと請け合い。手近なところ、無駄のあることを指摘し反省を促すと遂に成功する……お金があり余っていて、苦勞なしに人並み以上の御有志がポンツと出せる人は多くありません。多くの人は、財の功德を積むには工夫が要ります。そもそも限られた家計の中から功德を積む費用を捻出するのは、相應の心がけがないと不可能なのです。故に開導聖人は、自分のためには節約、儉約を守って、お莊嚴や布施・供養、御有志といった御法のための喜捨に励めと教えられました。実際、日常なにげなく使うお金の中には、何に使ったか分からないもの、あとで考えると無駄だったもの等が結構あるものですが、節約・儉約の意識がないと、その改善は難しいのです。そこで石岡上人は、財の功德を積むために一歩踏み込み、予算生活、即ち計画的に家計を運用することを教え、また貯金をすることで無駄を押さえ、御有志できる環境を整えてあげよと指導されたのです。ご信心のことで、個人の家計にここまで立ち入ると「一喝喰らう」のは当然です。それでも言うてあげることでも無駄遣いが改善されれば、誰もが財の功德を楽々と積めるようになります。お金は欲の象徴で、凡夫が最も執着するものの一つですから、言うてあげる人、教える人は必要です。財の功德が我が身の果報を増すと分かれば、あとは自身で徳を積む信者と成れるのです。

▼義納金等のお金は義務として、維持のため奉納すること……本門佛立宗は「随喜奉納」が原則で、その人の喜びに応じて御有志も増えるのが理想です。故に他宗のように割当ての高額奉納はありませんが、宗門やお寺の護持のための浄財奉納は所属の全信徒によって行われるのも原則です。ですから奉納額も大切ですが、組内の全信徒が護法愛宗の思いで本山奉納金やお寺の各種奉納に気持ちよく参加できるように、育成しなければならないのです。

【御教歌】 御初穂は第六天に奉り 仏に上げる己が残物

役中御講御法門 石岡日養上人のご講話に学ぶ (H29/7)

「私が組長になったら」(7) 具体的なご奉公⑥

昭和四十二年刊『信徒心得帳』収録の「私が組長になったら」の中の、実際に石岡上人が組長になったとして、すぐに取り掛かるであろうご奉公の具体例を順次学んでいます。

今回は「ご先祖の供養と御講の功德をきちんと教えよ」とのご指導です。信者としては当然のことですが、功德行の基本を曖昧にすると、結局ご信者としては大成しないのは、今も昔も変わらないようです。「親の供養ぐらい……と軽く考えず、丁寧に育成しましょう。」

▼ご先祖を大切にお祀りすること。霊簿のないお宅は半紙を長く二つ折りにして書いてさしあげる。お教務さんにご回向してもらおうことをお話する……「大切な親の供養はもちろん、ご先祖を祀り、弔うのは子孫の務め」が常識と油断してはなりません。世間では、「お金が勿体ない」と親の供養も節約、あるいは省略する人が増えているそうです。長寿社会で長引く老々介護に親子関係が変わる人もあります。増え続ける葬儀社間の競争で、簡略や安価が強調されるのもあるでしょう。そんな誤りを修正すべき宗教者や親の存在が薄れたのも大きな要因です。結果、遺骨すら放置される現代日本の世相が生まれます。そもそも亡き霊は消滅せず、妙法口唱の功德で靈魂を豊かにし、次の人生への再生を計るのが仏教の考え方で、大恩あるご先祖や親の幸福を祈るのは菩薩心です。それを否定すれば不忠者となり、勿体ないとケチれば慳貪の罪障を得、人の道を外します。開導聖人は「先祖の弔いは親の恩を報じ、我が身の罪滅の祈りとなる。また法体の折伏となる故に弘通のご奉公也(7/406)」と仰せです。信者である以前の人の道を堂々と諭し、若い人も新しい人もご先祖の命日にはお寺参詣してお塔婆をあげてことを教え、孝養の徳が積めるよう育てましょう。

▼御講はご弘通の道場で、我が家の家内安全のためにも大切な功德の大きなことを、呑み込むようにお話しする……御講は世間の法事と違います。お看経をし、一座の法要を勤めますが、中心はご信心を学ぶ「御法門聴聞」で、故に開導聖人は「御講席はサビ刀を研ぐ場所と心得べきなり。サビを捨ておくは謗法也(11/93)」とも仰せです。そもそも菩薩行は仏祖の功德に至ることを目指し、常精進で磨くのが基本です。「もうこれで十分」と悟れば、凡夫の功德行は成立しません。そんな仏祖の真実のお弟子、佛立菩薩を育てる場所や時間を提供し、同時に参詣者の口唱をいただいてご祈願を得、ご先祖の供養や行者供養の徳まで頂戴するのですから、一席の御講を精一杯勤める功德は大きいのです。「御布施を包まねばならないので誘いにくい」という人もいますが、法を学んで(法施)在家が外護の布施供養で応え、功德を積むのは仏教の基本的な在り方で、故に財の果報も増すのです。これは開導聖人が編み出された信行錬磨のシステムで、今や国内はもちろん海外にも定着をした我々の誇りとすべきご奉公です。自信を持って御講参詣の功德、お席を立てる功德を教えてください。なお、様々な事情で参れない人に、せめて外護の功德を勧めるのが添え講参詣です。役中さん一人あたり五人程度の将引を毎月すれば、御講参詣も賑やかにあります。

▼ご供養は手軽で軽便にすること。毎月、定期的にある行事はなるべく経費のかからないよう、無駄をせぬよう教える……行者を供養してその命を継ぐことは、仏典にも多々あるご弘通の基です。故に開導聖人は「信者を供養して御講を勤め、貧乏したということ昔よりその例なき(13/298)」と節儉を守り、精一杯の供養を教えました。ただ、毎月奉修される御講です。その志を守り、華美にならないようにと教えたのは、どんな人も続く秘訣です。

「御教歌」 罰のあたるはじめは何と尋ねれば 御講参のいやになるなり

役中御講御法門 石岡日養上人のご講話に学ぶ (H29/8)

「私が組長になったら」(8) 具体的なご奉公⑦

昭和四十二年刊『信徒心得帳』収録の「私が組長になったら」の中の、実際に石岡上人が組長になったとして、すぐに取り掛かるであろうご奉公の具体例を順次学んでいます。

今回は「ご信者同士のお付き合ひ、殊にはお葬儀の際の心得」についての指導です。お付き合ひの仕方ひとつでご信心が育ったり育たなかったりします。特に家族にとつて一大事のお葬儀のお世話は重要で、信行相続を左右します。まごころを込めて臨みましょう。

▼見栄を張る人のためには、月初め役中打合せ(役中協議会のこと)のとき、あるいは教務さんのおられる席で、「お付き合ひに物のやり取りは廃止いたしましたしょう」と申合せする。虚礼廃止……「これ見よがしに物を配るので、お付き合ひが大変」という事例がもしあれば、

過度な物品のやり取りがご信者同士の付き合ひの障害とならぬよう思い切つて申合せをすることが大事です。ただし、心ばかりの茶菓子まで禁じ、「信者に供養せよ」との功德行を止めてはなりません。経済的に余力があり、組内のバランスが取りにくい場合は、お寺の護持やご弘通のための御有志として活かせるよう、お教務に相談しながら工夫しましょう。

▼お通夜の場合は賑やかにお参りさせていただくが、香典等の心配をかけぬ申合せをする。故人のために沢山お看経をお上げしてあげることの結構なことを正意としてご奉公……お世話になった方はもちろん、組内のご信者が帰寂されたら今生のお別れに伺い、精一杯の御題目口唱で寂光へと送らせていただくのが佛立信者の葬送です。「葬儀が続くとお香典が大変」と本末転倒しないよう工夫し、送る側も送られる側の家族も「口唱のお供えが一番有難い」と知る組づくりを、普段から心がけましょう。組内の葬儀なのに「あまり付き合ひがないから参らない」と済ませる雰囲気は、そもそもご信心の仕方がズレています。

▼婦人会幹事さんほか、一〜二名のご家庭に向くお方を選んでお勝手のお手伝い等のご奉公。湯灌や納棺等は馴れた役中が一人でご奉公。丁寧にしてあげる……昔と違って、台所に他人が入るのを嫌う家庭が増えました。非常時の賄いは専門業者が請け負い、湯灌等も病院や葬儀社がしてくれます。そもそも家で葬儀を出すケース自体がほとんどなくなりまので、組内のお手伝いの場があまりないのも事実です。故に役中さんでも、一般の会葬者並の参列で済ませる方もあります。業者任せでも終わる今日の葬祭事情ですが、葬儀社は故人を寂光に送るための供養は教えません。肉親の死という命を深く考える機会に、親身に寄り添つてお世話する役中さんのご信心を通して信行相続ができるようご奉公しましょう。

▼六文銭や謗法物の不要なことを指導、廃止する。火葬場にも役中一人ご奉公等々、日常生活に結び付いた事項を旧来の陋習(悪い習慣)の改善に心掛ける……今日の葬送儀礼は、それぞれの地域で育った風習が俗信・迷信も含めて雑多に定着し、これが世間の不信の種にもなっています。同信の唱える御題目口唱の功德をいただき、妙法のお供をして寂光を目指すという教えの筋を厳格に教え、家族が故人のために口唱できるよう導いてあげましょう。

▼そして文明の時代になつた本門佛立宗は、開化第一に相応しい組にする。家庭生活を明るく豊かにするよう志向する……慣習の中でなんとなく信仰に向き合つて先祖祀りをするのではなく、御題目の功德で自らの命を磨き、以て世界の平和や地域の幸福のために貢献し、同時にご先祖への報恩の思いをで日常的に信行の功德を回向するのが佛立信心です。そして、そんな信行の功德を家族で積むところに、信者の家庭の幸せも築かれるのです。

「御教歌」 おのが身をいのらんとせば人をまた 助けんとする信者なりけり

役中御講御法門 石岡日養上人のご講話に学ぶ (H29/9)

「私が組長になったら」⑨ 具体的なご奉公⑧

昭和四十二年刊『信徒心得帳』収録の「私が組長になったら」の中の、実際に石岡上人が組長になったとして、すぐに取り掛かるであろうご奉公の具体例を順次学んでいます。

今回は「後継者を育てる信行相続のポイント」のご教示と拝します。一足飛びに後継者は育ちません。時間はあつという間に流れます。油断して、「気付けば人が育っていない」では法灯が絶えかねません。そうならないよう、普段のご奉公の中で育成をすることです。

▼御利益をいただいた新教化には、御法さまの御恩返しにはお教化でお返しすることを、喜びのさめぬ間に手引きする……役中のご奉公は、詰まるところ相手の方がご利益をいただくお世話をするのですが、そんなご奉公の甲斐あつて見事現証を得られたら、即お教化の大事を教えよ、と仰せです。如来使として妙法を勧めるのは大事な菩薩行ですが、これは理屈で学ぶより、「御題目で助けていただいた。有難い。他の人にも教えよう」と自身の喜びから行動する方が自然に、早く覚えます。石岡上人の乗泉寺門末では「受けた大恩、教化で返せ」と日常的に耳にします。小さな御利益でも、その喜びを即座にお教化の菩薩行に向ける後押しを、日頃から心掛けるのが弘通者を育てる秘訣なのです。「あの人にお教化はまだ早い」などと大人ぶって、気付けば誰も教化をしない組を作る役中では困ります。

▼お教化が出来たら、面倒を見てあげるように後押しをしてあげる……せっかくお教化をしても、「入信書が入ればほったらかし」ではご信者に育ちません。ご信心を磨き、凡夫の心が妙法の功德で菩薩心に成長するのがお教化で、入信書の記入はその通過点。それを「教化成就」と言上するのも現状把握の目安です。功德の積み方を身に付け、信者らしい視点が育つまで油断せず育成することを、これも日頃から教えます。手の掛る教化子のお世話ほど、その苦勞の分だけ功德も大きくなります。教えることで自分も学び、成長出来ます。

▼半年もすれば、役中の助手くらいの御奉公は手伝ってもらって、役中養成を知らず知らずの間にする……自分に必要なことしかしらない間は、まだ菩薩心を磨く功德行の外側です。ただし、時間もお金も労力も、まず自分のために使おうとするのは凡夫にとって当然の発想で、ボランティアも多くの方は、余力があるから出来るのです。それを御法のため、他の人のために喜んで使える人に成長せよ、と仏さまは菩薩行を説かれるのですから、教えを学んだだけで身に付けるのは至難です。そんなお互いにとって、役中のご奉公は菩薩行の稽古です。実際、「お役をいただいたのでご奉公の時間を作る」「お役目なので巡回する」と形から入り、ご奉公で功德を積み、罪障消滅を実感する人は結構あります。「助手として手伝ってもらおう」と仰せなのは丸投げせず、自身が手本となって教えるということですが、手伝わせるのは自分が樂するためでなく、菩薩的なご信心を覚えていただくためです。面倒な用事を押し付ける感覚の人は、「私は限界。代わってよ」と投げ出したり、「頼むと気の毒なので自分でする」と丸抱えしますが、これは大きな心得違い。「まだ早い」ではなく、早いうちから「他のためにご奉公をさせていただくこと」を教えてこそ役中が育つのです。

▼そんなに甘くいくものではない、と問題にされないかも知れないが、かんぬきを入れていく証拠である。……とは言え、これらで苦勞される方たちの中には、「そんなに都合よくいけば苦勞はない」と感じる人もあるでしょう。そんな方たちに石岡上人は、「それがカンヌキ信心。御法にお縋りして一つずつやってみよ。必ず道は開く」と励まされているのです。

【御教歌】 かあいさに氣随きままにそだておく 子の身ばかりの不仕合なし

役中御講御法門 石岡日養上人のご講話に学ぶ (H29/10)

「私が組長になったら」(10) 具体的なご奉公⑩

昭和四十二年刊『信徒心得帳』収録の「私が組長になったら」の中の、実際に石岡上人が組長になったとして、すぐに取り掛かるであろうご奉公の具体例を順次学んでいます。

今回は「組長のご奉公のお手伝い」のアドバイスです。忙しく、責任感の強い人ほど、責任ある組長のご奉公が負担になると思いがちですが、無理して一人で丸抱えするのではなく、「逆転の発想」で手伝っていただくと同時に後継者を育成せよと教えておられます。

▼**昼は家内で用事の足りるところは家内に、特に未亡人のところは妻かお母さんに……**男性の組長と専業主婦のご家内という設定です。かつては先祖を祀る信仰は家の柱で、一家の主の主人がその中心にありました。ですから幹部役中は圧倒的に男性が占めたのです。女性の地位が向上し、共働きが増え、女性が長生きする現代は女性の組長が増えたのも当然ですが、故に家事の分業と同様に、お互いが自然にご奉公の応援をし合う空気づくりは大切です。独身男性や未亡人のお宅には、間違いを犯さない自信はあっても同性のご奉公者が良い等の分業意識を育てることで、若いご夫婦も組長を勤められる環境が整います。

▼**息子や娘にもそれぞれ向き向きで、ご奉公を手伝ってもらおう。信行相続にもなり、組内のご奉公に全員参加すればご奉公が食後の話題にのぼるようになる……**昔は子供も大事な働き手で、農作業や家事の手伝いを普通にしました。家族が「生きるための共同体」として機能する中で、父祖からの生きる知恵を伝承したのです。その延長で、ご奉公の手伝いもし、子供も生活の中で自然とご信心を覚えたのが、今は子供も忙しく、バラバラな家族が増え、一方で家電等が進歩し手伝い不要の分野が増えて、事情が変わりました。しかし、だからこそ佛立家族はご信心を柱に結束し、本来の家族関係を築く努力をして、世相に一石を投じる意気も大事です。御講のご供養の準備やパソコンでの書類づくり等、出来ることを探して役割を与える努力をしましょう。崩壊した家庭がご信心で回復した事例もあるのです。

▼**一家が協力すれば、組長のご奉公も一家の分業となり、役中さんにもそれぞれ分担してもらおう……**便利になりつつも生活が多様化し、多忙な世の中ですから、ご奉公も分業して負担を軽減する工夫は大事です。ただし、分業は本来、楽をするだけが目的ではありません。効率をあげれば二倍、三倍とご奉公の範囲が広がり、より充実した良質の菩薩行が生まれます。御講席ひとつとっても、組長さんが一人で御宝前の準備をし、お教務さんのお給仕、拍子木係、添講の受付、ご披露等とフル回転していると、慌ただしく雑然とした空気を作り、ミスも出がちですが、皆がそれらを分担して組長がドンと座り、ご信心の手本を示す参詣に集中すれば、御講の莊嚴味はグンと上がります。皆も功德が積めます。そんな質や量を高めるために、分業できる下地を根気よく作るのです。無理な押し付けはダメです。

▼**ただし、尻の重い組長で、あごで人を使うつもりでは出来ない。先に立って手伝ってもらおうつもりで引つ張る……**「面倒なのでやらせる」「やりたくないで丸投げ」では分担が育成につながりません。せっかくの尊い功德行も、「押し付けられて損した」という受け止め方では御利益を生みませんし、却ってご信心を嫌う種になり、罪障を起こす因にもなりかねません。原因は自分のご信心に向き合う姿勢にあります。有難いご奉公なので、功德を独り占めしないで、ご奉公の仕方を覚えてもらおうと心から思っているのです。家族や組内の役中さんも誇りを持ってお手伝いでき、ご奉公の出来るご信者に育つのだと、心得ましよう。

「御教歌」 寂光の覚えとするは修因也 うくる感果は疑ひもなし

役中御講御法門 石岡日養上人のご講話に学ぶ (H29/11)

「私が組長になったら」 (11) 具体的なご奉公⑩

昭和四十二年刊『信徒心得帳』収録の「私が組長になったら」の中の、実際に石岡上人が組長になったとして、すぐに取り掛かるであろうご奉公の具体例を順次学んでいます。

今回は組内信徒の軸となり、皆を導く良きリーダーとなるためのアドバイスです。知識や経験に頼らず、ご信心の徳を得て、皆に信頼されるリーダーになれと教えておられます。

▼一日一軒のお助行も、組内全信者に吹き込んで、そういう空気に盛り上げれば、組長のご奉公は組内から慕われ、愛されるお母さんになること請け合い……お助行は佛立菩薩の愛情パトロールで、日常的な巡回が豊かな人間関係を築き、ご信心を育てます。ただ、好意的な受け手は少なく、非協力的な役中さんがいると実践自体が困難にもなります。そこで挫折せず、お助行が常態化する空気を作るため、「一日一軒」と吹き込みなさいと仰せです。何事も定着するまで根気よく言い続けることは大事です。しつこいと嫌われる心配は無用。なぜなら日常的なお助行は御利益を顕すからで、故に「愛されること請け合い」なのです。

▼お教務さんは受け持ち信者のお父さんで、大事にさせてもらおう。手に負えないところを厳しく一言お願いすれば、円満にご奉公成就……先に組長を「愛されるお母さん」と言われたのは、担当教務を組内信徒のお父さんと譬えてのことです。現代日本の家族観とは少し違いかも知れませんが、家族を厳しく導く父の徳と、それを慈愛で支える母の徳で組内信徒を育成せよということで、「うちは母さんが強いから」とお教務さんがないがしろにする組長では組内はまとまりません。良妻賢母は古いなどと言わず、日ごろから組長が率先してお教務さんにお仕えすれば、実際に担当教務を中心にして、円満にご奉公が進むのです。

▼自宅の御宝前のお看経を怠らぬこと。特に夜の御礼のお看経を忘れぬように……ご奉公はお看経の功德で勤めるのは鉄則です。人を導く役中となるために、より多くのことを学び、現場での経験を重ねることは大事ですが、自身の知恵や才覚で菩薩行が出来るつもりになると失敗します。お互いは罪深い凡夫ですから、常に御法の功德をいただいてご奉公を勤めさせていただく信者となりましょう。特に疲れていても一日のご奉公の御礼を御宝前に申し上げ、口唱のご法味をお供えできる信心前を目指せと仰せです。結果は付いてきます。

▼自分の商売だけで四苦八苦、他人のことより手前の頭の蠅を追えと利口者は言う。これは「頭の蠅はお祖師さまに追い払ってもらえ」、「これである……ご奉公第一のご信心を学ぶと、「生活あつてのご信心でしょう」「自分のことも出来ないようでは、他の人のお世話もできません」ともつともらしく言う人が必ずいます。しかし、ご奉公を中心にするれば、すべてが上手く回るといふ妙を体験するのが本物の役中さんでもあります。それを教えるのです。

▼ご奉公は手軽に、身近につけてしまうよう工夫努力する。世法はますます専門的に、熟練工のごとく高度化してくる。顕微鏡のように視野が狭くなる。多角的に達観する力が鈍くなる。近視眼的になる。そこにもいろいろの不測の不幸が芽生える。組長のご奉公は、気の利いた老練な船長のごとくともいうか、総合的に先を見て、段取りすることを身に付け、前と後とを常に注意する……こだわりの内容によっては必要ですが、役中ご奉公の場合は徹底的に極めて実践するよりも、毎朝顔を洗うようにお助行し、食事をするように口唱に励むぐらいの、あまり難しくしない感覚が大事です。完璧なお給仕が出来なくても、一生懸命に御法に仕えて罪障消滅出来れば良いのです。御利益を得る筋を見失うなど仰せです。

「御教歌」 わが及ぶ心の限りつかへなば おぼつかなさもなき御法なり

役中御講御法門 石岡日養上人のご講話に学ぶ (H30/1)

「私が組長になったら」 ⑫ 具体的なご奉公⑪

昭和四十二年刊『信徒心得帳』収録の「私が組長になったら」の中の、実際に石岡上人が組長になったとして、すぐに取り掛かるであろうご奉公の具体例を順次学んでいます。今回は世法とご奉公を両立し、仕事をちゃんと勤めながらご奉公もバリバリ率先して行う役中像を教えるお話しです。何事も二足のワラジを履く「両立」は難しく、「仕事が忙しいので、暇になったらやりませう」と言われると「無理もない」とあきらめる話も少なくありませんが、この講話の頃より今は、格段に自営業者が減って勤め人が大半となり、女性の就業率も増え、高齢者も自立して働くことを求められる世相です。先見の明を感じます。

▼ご弘通は生きもので、組内は目放しできないものと分かれば、自然に己が磨かれる……貧乏くじの雑用係的な役中のイメージでは、忙しくても挑戦しようとは思いません。順番に務める町会の役のような「決まったことを消化する役目」なら、暇な人がすればいいと思われませう。ですから、仕事を持つ人が非協力的と感じるならば、「自分たちが魅力のないお役に、値打ちを下げないか」を点検しなければなりません。ご弘通は生きものです。手をかけるだけ伸び、横着した分だけ罪障が出ます。故に「目が放せない」と心得て絶えず巡回し、ご信心を育てる努力が要ります。結果、自身もご奉公の功德で磨かれます。そんな、「組内のご信心者の幸せのために生き生きとご奉公する姿を見せよ」と仰せなのです。

▼それゆえ、若い人、三十歳前後の方だったら、ご商売の上でも、ご奉公の功德に物心両面で微笑むに違いない……ご奉公は一生懸命に勤めた分だけ、必ず我が身の果報として返ってきます。役中ご奉公ならば猶更です。ゆえにこれを先輩が実践して見せれば、純粹で感性の豊かな若い世代も「なるほどご信心の功德で仕事も順調にいくのだ」と得心し、微笑むのです。実際、若手のご奉公者はそんな役中さんの下で育ちます。そこで「若いから無理」ではなく、若い人に自信を持って教えるだけのご奉公に、まずは自身が努めるのです。

▼組内の人の人気取りに走り、お寺の方針に一言居士になったら、反対の願わざる結果が生まれてくる。体験すればよく分かる……み教えを真面目に受け止め、素直正直にコツコツと努めるので果報を増し、自他が良くなるのに、み教えより人の顔色や自身の我に振り回されて、少しも功德が積めない人がいます。やる気のない人や我儘な慢心者からも良く言われようと八方美人になったり、何でも一言反論して自己主張する姿勢は、せっかくの仏智がいたただけず、信者としての信頼も損なって、育成に躓きます。事例に学べと仰せです。

▼ご商売の上に良い知恵が湧いてまいります。これで世法は成功疑いなし……逆にご奉公第一で素直にご信心を学ぶと、お仕事はもちろん家庭内のことや地域社会とのお付き合いも、すべての縁が良く巡るようになります。これが御法の智慧をいただくということです。ですから、朝参詣や御修行参詣に誘ったり、御講の席主や御宝前のお荘厳等を勧めて、まずはご信心の功德が体験できるよう教えましょう。最初は無理にでも誘うのが慈悲です。

▼商売やお勤めを投げては、ご奉公は長続きしない……ご奉公が出来ない人に、「仕事よりご奉公せよ」と折伏する人がいます。これが世法の生業を軽んじた言葉なら、それは信心が強いのではなく、自己本位で世間知らずと自重せねばなりません。信心第一で世法と両立するのが信者のご利益で、これはお祖師さまが四条金吾さんのご信心を褒められた故事でも知られます。むしろ、ご信心第一で世法が良くなることを知って育成に努めるのです。

【御教歌】 営みを捨ててよとは誰かいはん 信心をせよ諸願成就

役中御講御法門 石岡日養上人のご講話に学ぶ (H30/2)

「私が組長になったら」 (13) 具体的なご奉公⑫

昭和四十二年刊『信徒心得帳』収録の「私が組長になったら」の中の、実際に石岡上人が組長になったとして、すぐに取り掛かるであろうご奉公の具体例を順次学んでいます。

今回いただくお言葉でこの講話は終了です。最後は、忙しい人もご奉公の功德が積める環境を作ること。若い人には「ご奉公の功德を自ら積む」ことを甘やかさずに教えること。そして、真面目にご奉公の基本を勤めること、を仰せです。習ったことを実践しましょう。

▼忙しい時勢で、組内信者は最大限二十戸ぐらいまで。できれば十〜十五戸ぐらいでしたら組長の手がよく行き届く。……人のお世話は大変です。仕事を持つ人や、家庭内に要介護者等を抱える方などは、月に一度は担当するご信者宅を訪ねて一緒にお看経をしたり、ご信心を励ます言葉を掛ける等の育成が、気持ちにはあっても時間が取れなかつたりします。そこで共働きが増え、生活圏も広がるこれからは、有能な組長でも二十軒を目安とし、育成の手が届く体制作りを、と指導されたのです。地域制より教化親子の信心の繋がりを重視する佛立宗の組は、弘通力のある人ほど大きく育てます。その一方で、お世話できる範囲(あるいは目標)を意識することが、育成のツボとなるのです。ちなみに一班五軒が提唱されたのもこの頃です。多忙な組長も、五人の班長を育てればゆとりを持って務まります。

▼それゆえ、増加したら分組する。養成した若手のお方に組長になってもらって、横の連携を密にしてご奉公。そうすれば家庭では喜ばれ、お得意様や勤め先からも喜ばれること間違いないし……組長(または班長)の担当するご奉公の範囲が見えてくれば、それ以上にご信者が増えればどうすべきかも予測して準備ができます。ご信心の組織は「人」が軸ですから、分組または分班のためには、必然、核になる役中を育てねばなりません。「横の連携を密に」とあるのは、新しい役中のサポートです。こうして範囲を絞ることで育成の実もあがり、家庭人や社会人の顔との両立も容易になります。逆に将来図を描けず抱えすぎる組長は、手が届かずに懈怠者が増え、忙しい割に成果が出ないご奉公になりやすいのも事実です。

▼青年会、薫化会は、それぞれの係のご奉公のしやすいように心遣いして伸びるように。くれぐれも甘やかしては失敗する。ご利益は「棚から牡丹餅」を求めてはならない。ご奉公の苦勞の中に、自然ににじみ出てくるものである。……組の新たな役中ご奉公者の予備軍として、組内信徒の信行相続のための努力を、まず組長が率先してせよと仰せです。「子供の信心教育は親の責任」と突き放さず、子供たちがご信心できるよう、まずは挨拶、次に将引、そして経済的なサポートも工夫すると良いでしょう。ただし自分で苦勞し、努力して功德を積むことを教えないとご信心は育ちません。参詣や口唱、各種当番や御有志等、少しずつ挑戦させて背中を押し、ほめたり叱ったりで励まして、功德を積む喜びを教えましょう。

▼罪を作らぬよう、お寺の方針を忠実に守って黙々と功德を積めば、大きな報酬を授かる。平凡なことを馬鹿にしないで、当たり前前にさせてもらえば良いので、誰でもできる。名組長を夢見てはならない。平凡な、忠実な組長を目指して。組長の苦勞もまた楽し……この講話の締めは、さすがにご弘通の現場を知り尽くした深みのあるご教示です。馴れると我が出やすく、ベテランほど自分流を誇りがちにもなりますが、ご信心の功德でご奉公を勤める以上、素直・正直を守らねばなりません。故に罪障を恐れ、お寺のご奉公に喜んで協力し、御宝前から頂戴した自身のご奉公を有難く勤める中に、楽しみを見つけよと仰せなのです。

「御教歌」 仏説をきいて其ままうたがはず 羨ましきは正直な人